

天野為之の取引所論

鈴木芳徳

目次

- 一、はじめに
- 二、空売買批判（明治三十三年）
- 三、「取引所改革の三要件」（明治三十三年）
- 四、小括

一、はじめに

天野為之（一八六一—一九三八年、万延一—昭一三）の取引所に関する論説を紹介し、⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾検討したい。天野の取引所論は、かれの教育者的生真面目さからくる視野の狭さのゆえか、取引所を賭博場と断定し、空取引・定期取引が国民の射幸心をそそるものと考え、きわめて批判的な論調の下に展開される。ただし、この論調の裏側にあるものは、かれ独特の「勤儉貯蓄論」であって、国民の貯蓄こそが国の資本不足を救い、資本形成を促進する、という判断がある。⁽⁵⁾⁽⁶⁾その意味では、単なる道德論でないことが知られねばならない。

こうした天野の論調は、田口卯吉の批判するところであって、田口によれば「經濟論と云はんよりは道德論」にすぎず、「一箇の価値なき」ものとされるのである。

まず、天野為之の略伝を記しておこう。天野は、唐津藩医である天野松庵の長男として江戸深川に生れ、唐津藩英語学校で高橋是清に学ぶ⁽⁷⁾。東京開成学校をへて、一八八二年東大文学部政治理財科卒。改進黨入党。東京専門学校（のちの早稲田大学）の創設に寄与し、早大教授、商科長、学長、早稲田実業学校校長を歴任。高田早苗、坪内雄蔵とともに早稲田三尊と称さる。町田忠治が一八九五年（明治二十八年）に創刊した『東洋經濟新報』（英文名：The Oriental Economist）に客員として加わり、一八九七年（明治三十一年）から主宰、日清戦争から日露戦争までの一〇年間、主宰者として論陣をはった⁽⁸⁾。天野が『東洋經濟新報』に社説を執筆したのは、一八九七年（明治三十一年）三月第四八号から、一九〇七年（明治四〇年）九月（第四二五号）までであり、この明治三〇年代において『東洋經濟新報』は最有力、最優秀の經濟雑誌であった。なおこれに先んじて天野は、一八八九年（明治二十二年）二月、自ら『日本理財雜誌』（英文名：The Japan Economist）を創刊（同年末第二二号で終刊？）した経緯がある。

明治期における政府当局の取引所に対する政策的態度は二転三転し、朝令暮改まさに定見を欠くものであった。『東洋經濟新報』誌上の論説は、その間の事情を次のように伝えている。（株券の市価に就て、第二七八号、明治三六年八月二十五日、論説。無署名であるが、恐らくは天野為之によるものと推定される。）

「取引所に対する政府の政策は実に兎戯に類す。先きに限月短縮令を出したるも、其処置偏頗にして実効を奏する能はず。且無意味の配当制限を設けて一般の指弾を受く、而して其非難漸く激しきに至るや、卒然として延取引の省令を発してさきの勅令の精神を滅却し事実限月取引の復旧を公許す。此頃に至りては又更に定期期限を元に復して而して延取引を禁絶せんとす。政府の方針なる者果して何処に存するや。殆んど端睨すべからず。斯の如く反覆極りなき

政府を戴き、その翻委に任ず。売買当事者たる者焉んぞ安んじて取引に従事するを得ん。」

早速、天野の主張するところを聞こう。

(1) 本稿は、既発表の「田口卯吉の取引所論」(『証券研究』第一〇五卷所収、一九九二年一月)「明治の取引所論」(『福岡大学商学論叢』第三九卷第三・四号、一九九五年三月)、「天野為之の取引所論とその特質」(本誌次号掲載予定)、ならびに近く発表予定の「福沢諭吉の取引所論」と姉妹篇の關係にある。そのため、参考文献などの一部を、本稿では割愛したところがある。尚、この一連の研究につき、日本証券奨学財団から研究助成を賜わった。記して感謝したい。

尚、本稿では、天野為之の論說そのものの引用とその解題・紹介にかなりの紙幅を費している。これは『東洋経済新報』紙上に長期にわたって散在する關係論說を一望の下に収めたいとの思いからであって、ご諒察を乞う次第である。

(2) 天野為之には、多くの著作があるにも拘らず、全集、著作集の類が無い。天野の著作一覧については、浅野栄次郎・西野長寿『天野為之』(実業之日本社、昭和二五年)所載のものが参考になる。また、大淵利男「天野為之と『財政学』について」(日本大学法学部『政経研究』第二八卷第二号)には、これを補足したものがある。

(3) 天野為之が『東洋経済新報』誌上に執筆した取引所論關係の論說は、のちに『経済策論』(実業之日本社、明治四三年)に収載された。また、『東洋経済新報』誌上に「勤儉新論」として七回連載したものは、のちに『勤儉貯蓄新論』(宝永館、明治三四年)に収録された。小稿では、原文として『東洋経済新報』誌上に掲載された論說のほうを用いている。但、表記を改め、句読点を付した部分がある。

(4) 天野為之が『東洋経済新報』に掲載した論文の目録として次のものがある。

西田長寿、高野善一、杉本富士夫「天野為之先生雑誌掲載論文目録(一)」「(三)」(早稲田大学図書館紀要、第四号(昭和三七年一月)、第五号(昭和三八年二月)、第六号(昭和三九年二月))。

『東洋経済新報』には、無署名論說の中に天野為之が執筆したものが含まれており、本目録はその点にも十分配慮して作成されている。

(5) なお、天野為之の編『小学修身経入門、尋常科生徒用』、富山房、明治二七年(明治新聞雑誌文庫蔵)、天野為之の編『小学修身経、高等科教師用、卷一』、西村茂樹校定、訂正三版、明治二八年(国立国会図書館蔵)がある。

(6) 天野の主張における重要なポイントは、現実資本形成にとってみて、銀行と証券の世界がどうであればプラスの作用を持ちう

るか、というところにある。例えば、「担保割引は金融切迫の一大原因なり(上)」(『東洋経済新報』、第九六号、明治三十一年七月二五日、無署名論説)は、日本銀行の担保割引制度を論じたもので、「担保制度が此の不景気を助長したること」は争いえない事実であり、「担保制度の甚だ悪制たるを認識せしむるの好時機は、実に今日に在り。」とし、その実際の仕組みを次のように推理する。

「吾輩門外漢は實際如何なる種類の人々が果して日本銀行に保証割引の取引を為しつつあるやを知らずと雖とも、之を抵当として借出したる資金をば他の株金払込に使用しつつあるものは、恐くは十中の八九ならん。即ち其払込金額は、鉄道敷地代レール代若くは紡績器械代となりて、金融市場を去りたるにあらずや。此方面より見るも、担保制度の、金融を渋滞せしむる一大原因なるを知るに余りあり。」

「我経済社会の最大病患は、真正の商人が、株式の下落を恐るること蛇蝎よりも甚だしきの一事なり。畢竟是れ商人を挙げて、其本業を忘れて専ら株式売買に狂奔したる結果に外ならず。……現に商売不景気の為に手形不渡りとなり、破産宣告となるもの、其実は本業不景気の為に損失を受けて然るにあらず、其運転資本を株式に投じ、株式の下落したるが為め手形の支払に究したるの結果に外ならず。」

(7) 「さて、その時の五十名の生徒は藩の青年中でも、最も有望な一粒揃いであった。……当時の始めからの生徒で、今世の中に知られて生存しているのは、天野為之博士、曾根達蔵博士、今唐津にいる工学士の吉原礼助君、裁判官の掛下重次郎君、銀行家の大島小太郎君らで、その他故人となった者の中には、化学者の渡辺采次郎君、工学博士の辰野金吾君、西脇、山中、鈴木の諸君がある。」(高橋是清『高橋是清自伝』、千倉書房、昭和十一年、一二二頁)

(8) 『東洋経済新報』について若干のことを記しておく。『東洋経済新報』は、明治二十八年(一九八五年)十一月一日、若冠三二歳の町田忠治によって創刊され、当時は五の日に刊行される旬刊誌であった。主幹は、町田忠治(明治二十八年—明治三〇年)、天野為之(明治三〇年—明治四〇年)、植松考昭(明治四〇年—明治四五年)、三浦鍬太郎(明治四五年—大正十三年)、石橋湛山(大正十三年—昭和二年)であった。『週刊東洋経済』と改題したのは一九六一年であり、一九九一年(平成三年)六月八日号で五〇〇〇号を達成した。『東洋経済新報』は、自由主義・民主主義・反帝国主義・国際協調主義を思想的姿勢とした。なお、『東洋経済新報』について、長幸男「改題」(龍溪書舎復刻版『東洋経済新報』第一巻所収、一九九一年一〇月刊)、長幸男『石橋湛山——人と思想』、東洋経済新報社、一九七四年、長幸男『日本経済思想史研究』、未来社、一九六三年(第六章「日本資本主義におけるリベラリズムの再評価——石橋湛山論」)、杉原四郎『日本の経済雑誌』、日本経済評論社、一九八七年、などを参照。

二、空売買批判（明治三十三年）

明治三十三年（一九〇〇年）四月五日、天野為之は『東洋経済新報』第一五五号誌上に、「賭博的国民は外資輸入を語る可からず」を発表する。ここに天野の空商批判、取引所批判の大キャンペーンが始まった。これよりのち、明治三十五年（一九〇二年）六月三日の勅令第一五八号（いわゆる「取引所撲滅令」）発布に至る間、天野の『東洋経済新報』誌上におけるキャンペーンは続き、それは「取引所撲滅令」を以てしても未だ手ぬるい隔靴搔痒のものとする徹底した空商批判であった。すでに触れたように、『東洋経済新報』の創刊は明治二十八年（一八九五年）、天野為之がこれを主宰するのは明治三〇年（一八九七年）以降のことであるが、「当時の多くの識者階級が東洋経済新報を、あたかも学生が教科書を読むがごとく、ほとんど一字も残さず読んだということは、後にいたるまで、それらの人々が語っていたところであった。私が直接その述懐を聞いた人の中には、たとえば横浜の有名な実業家原富太郎氏、後に日銀総裁になり、枢密顧問官で終わった、深井英五氏らがある。町田忠治氏の回想記によれば、明治二十八年時代の小さな日本において、東洋経済新報は創刊の最初から三千以上の確実なる読者があったというのであるから、そのころの日本の識者階級は、ことごとく東洋経済新報の読者であったわけであろう。」（石橋湛山「東洋経済新報の回想」、東洋経済新報社『東洋経済新報、言論六十年』、同社、昭和三〇年、三六四頁）社会的な影響力の大きな誌面を主宰しつつ、天野の無比の筆力は、取引所改革問題を世に問い、「是に於て乎、之を非とする者、是とする者、紛然、雜然、全国を挙げて、一大討論会場と変化せしめたり。」（天野為之、『東洋経済新報』第一三四号、明治三十五年六月一日）天野の取引所批判、取引所改革論は、「号を重ね篇を連ねて」（同誌、第一六一号）のものであり、「一日も速に改革せざる可らざる所以を絶叫」（同誌、第二三四号）したものであった。その内容は以下に見るところであるが、端的に天野の用語を借りて云えば、取引所こそは「白昼

公開の賭博場」(第一六二号、第一七〇号、第一七四号)であり、「山師養成所」(第一五八号)であり、「勤勉の大敵」にして「貯蓄の大賊」(第一七四号)にほかならない、というものであった。

さて、天野為之の取引所論のうち、かなりまとまった論旨をもつ最初のものは、明治三十三年四月五日の『東洋経済新報』(第一五五号)に掲載された「賭博的国民は外資輸入を語る可からず」(のち天野為之『経済策論』、実業之日本社、明治四十三年、第七篇に所収)である。これは、のちになるとそれぞれ詳論されるところを、概括的に論じた小論であるがゆえに、その主張の全体像を知るためには便利な論説である。

天野は、まず、日本における「資本の欠乏」を訴える。「本邦の常に欧米諸国に及はざる所以の者其原因一にして足らずと雖、其尤も著大なる者は資本の欠乏にあり。」この欠乏を埋めようとする、国内で貯蓄を増すか、国外から資本輸入を計るかしかない。「此資本増加の方法に至りてや内にありては国民をして従来の資本を増加せしむると、外にありては外国の資本を輸入するとの二者其一に出てさる可からざることは世人の夙に承認する所なり。」その場合、勤儉貯蓄ということがあってのみ、外資輸入も意味があるのであって、それがない場合にいくら外資を輸入してみても不生産的な使用を増すのみである。「直言すれば国民勤儉にして始めて外資輸入の効あるのみ。相場を嗜しみ奢侈に溺るる我國民の如きは未だ遽かに外資輸入のことを語るに適せざる事なり。」「故に一國若し盛んに外貨を輸入せんと欲せば須らく先づ人民の驕奢心を抑へ投機心を制し、その勤儉貯蓄の念を熾んならしめざる可からず。」

この勤儉貯蓄の念を生ぜしめるためにこそ、「取引所の改正」は重要である。とくに投機の間としての取引所はつよく抑止されてしかるべきだ、と天野はいう。

「夫れ我邦各地の取引所はその株式たると米穀たると商品たるとを問わず、皆宛然^{えんぜん}たる大賭場たりとは世人の皆な評し合う所にして何人と雖も之を拒む能はざるの実あり。而して事の此に至れる原因は一に其定期期限の三ヶ月にし

て永きに失するの弊あるに由るなり。想ふに此大賭博場の繁昌は固より我國民の勤儉心貯蓄心に乏しきの結果なるに相違なしと雖、又翻つて之を思へば此賭博場の公開の爲めに世間無數の人殊に将来有望の商人を挙て此賭博場に集中せしめ、その着実堅忍の精神を失はしめ内外に於ける生産事業に従事するを厭はしめその投機心僥倖心を熾んならしめ、而かも此投機に常に随伴する驕奢の念を引興こさしむるの結果あるに至りては何人と雖非認する能はさるなり。

故に我が取引所は一方より之を見れば我國民に勤儉の心乏しきの結果なりと雖他の一方より見れば我國民をして勤儉の心を失はしむる最大原因たり。」「吾輩は、經濟的矯風の一策として此取引所制度に改正を施し殊に其期限に至りては之を一ヶ月に短縮し以てその賭博場を變して純粹なる取引所となし、以て我邦人をして思ひを投機に絶ちて着実の事業に従事せしめんと欲するなり。蓋此一事にして成るあらんか。吾輩は我經濟界に一大革命を加へ勤儉貯蓄の風一般に行はれ産業の發達極めて著大なると同時に夫の外資輸入をなして其利ありて其害なきに至るや必せり。此に至りて、我が經濟界始めて欧米と拮抗するに至らんのみ。斯かる根本的病根を度外に置き徒に眼を枝葉に注ぎ偏へに外貨の輸入を計るか如きは決して國家百年の計にあらざるなり。」「(『東洋經濟新報』第一五五号、明治三十三年四月五日)

すなわち、本論説において天野は、資本形成の必要から勤儉貯蓄を推奨し、勤儉貯蓄を阻害する要素として投機的賭博的取引所を弾劾する。この論旨を更に徹底させ、数字を掲げて論じたものが、『東洋經濟新報』の次号(第一五六号、明治三十三年四月一日)に執筆した「投機奢侈の病根を論して井伯松伯に望む」(のち『經濟策論』第七篇に所収)である。この論説で天野はまず取引所を「賭博的機関」と断じていう。

「今や勤儉の美風漸やく跡を社会に絶たんとす而して其原因を探くるに本邦現時の取引所制度の如きは其最大病根たるに相違なし。夫れ現時の取引所は皆な是れ大賭博場たりとは万民の認むる所。而してその此に至れる所以の者は、國民の勤儉の念少なきか為なることは勿論なりと雖も、翻つて之を觀察すれば此賭博的機関あるか為めに國民をして

益々その賭博奢侈の邪念を増長せしむるや争ふ可らざるの事実なり。」

其の事実を天野は東京株式取引所の「出来高」と「受渡高」とを次表の如くに示して伝えようとする。すなわち、
「今仮りに一株の平均価格を五〇円と見積りて此金額を計算する時は、一ヶ年間の売買金高は約二億五千万円の多

明治 32 年	日々売買出来高合計 (株)	月末受渡高 (株)
1 月	234,215	22,940
2 月	597,380	35,210
3 月	572,225	21,190
4 月	345,980	50,370
5 月	461,510	53,275
6 月	437,555	36,050
7 月	432,495	38,235
8 月	449,210	41,030
9 月	354,385	48,485
10 月	415,670	55,840
11 月	605,865	59,740
12 月	494,910	42,595
合 計	5,401,395	504,970

に上れとも、実際の受渡即真正の取引は約二千五百万円に過ぎずして、結局残余の二億二千万円は全く空取引に属せるを見るべし。依之観之、東京株式取引所に於ける売買高の殆んど全部は賭博的空売買なりと云ふも過言に非ざるなり。」

続けて天野は、米穀取引について東京深川米穀市場の数字を次のように掲げている。

「深川市場に於て実際に供給せられ需要せらるる現米石数は九〇余万石に過ぎるにも係らず、同定期市場の売買高は二千百三十余万石の巨額に達し、実に其内約二千余万石は全く空売買に属せる者なるを見るべし。即ち一石一〇円として之を金額に見積る時は、深川定期米市場の売買金額は二億一千余万円にして其内二億万円の多きは全く空売買なりと云ふべきなり。」

こうして、東京の株式取引所、米穀取引所だけをとってみても、その賭博的売買高は五億余万円の巨額に上り、したがって全国に散在する米、株商品の百箇所を越す取引所を合計すれば、この賭博的売買高

明治 32 年	定期米日々出来高合計 (石)	深川諸倉庫輸入高 (俵)	同 輸 出 高 (俵)
1 月	763,150	187,043	176,078
2 月	735,800	118,759	160,569
3 月	691,650	116,955	145,851
4 月	1,543,100	188,487	180,133
5 月	2,713,950	283,036	187,112
6 月	2,023,600	134,069	217,121
7 月	3,028,310	239,645	220,055
8 月	3,256,310	313,935	312,899
9 月	1,864,010	171,981	337,702
10 月	1,726,100	145,978	100,477
11 月	1,807,900	237,020	155,975
12 月	1,178,800	284,122	116,584
合 計	21,332,680	2,421,030	2,310,556

は幾百億万円の巨額に達するのでないか、という。「今之を合計する時は、全国に行はるる此種賭博的売買の金額幾百億万円の巨額に達すべきやを知るべからず。而して此大賭博の為に心身を勞する者其数果して幾くなるや。吾輩未だ之を詳知する能はずと雖、此賭博的売買高より推論するときはその員数も又極めて莫大なるや明なり。」

そのことの「国家に及ぼすの弊」を以下天野は論じていう。投機的浮利を追ひ、勤儉貯蓄の美風を失うに至って「一国の生産力を喪失して事業の発展を遏め、之が為に一国の貯蓄力を消耗して資本の増加を妨くる幾くなるを知らず。」「その雄を賭博場に争ふ者多くは皆是れ比較的に才氣あり、知識あり、技倆あり、若し其敏腕を生産事業に振はしめは一国の産業に於て当に大功を奏すへきの輩なり。而かも此屈強の輩を駆って空しく賭博場裏の悪鬼とならしめ、其敏腕を産業の興起に用ゆる能はず。国家の損する所豈莫大なりと云はさるべけんや。」天野の觀察が、国家的損失——生産力の上昇、資本形成の増進、人材の適正配置といった諸部面での損失に集中されていることは注目されてよい。

その原因と対応策如何、これが次の問題である。天野は、その原因についていう。「然れとも近く其原因を求むる時は吾輩は之を以て現

今の取引所の定期期限三月制を採れるに帰せざるべからず。蓋し定期期限三ヶ月は永きに失せり。取引所をして賭博的空売買の市場とならしむるの弊因全く茲に存せり。」「今之を海外の実例に徴するに、英国は此点に於て二週間の制を採用し、独逸は一月制を採用し、米國に至りては一日を以て其期限と為せり。即ち其期限は何れも皆短くして以て投機の爲めに無用の余地を存せず。而して本邦の如き長期の制度を採用せる者今日の文明諸國中殆んど其類を見ざるなり。故に吾輩は前号にも之を述べたるが如く今日の投機の悪弊を除くの一策として、先づ断然現今の定期期限三ヶ月制度を改革して之を一月に短縮せんと欲するなり。」

天野は、さらに続けて「取引所の改革に就て当業者及農商務大臣に問ふ」を『東洋經濟新報』第一五七号（明治三三年四月二十五日）に發表する。（のち『經濟策論』第七篇に所収）

本論説において天野は農商務大臣に激しく問いかけていう。

「吾輩は取引所の改革に関し大に農商務大臣に問はんと欲する所あり。惟ふに農商務大臣は一国産業の發達を計るを以て其任務と為す者なり。故に苟くも其發達を妨け其隆盛を傷くるの原因あるに於ては、奮って之を除却するに力めざるべからざること是れその当然の職責なり。而るに今翻て我取引所の實際を見れば何れも皆一大賭博場となり正に投機奢侈の一大病根勤儉貯蓄の一大障害を成せること争ふべからざるの事實にして、之が爲めに一国産業の進歩を害し、國家の繁榮を傷へること尠少に非ざるなり。故に現今の取引所を改革して此禍根を絶ち此障害を除くは是れ農商務大臣の迫るる能はざる職責なるを知る。吾輩は此点に於て大に農商務大臣の敏腕を振はんことを望まざるべからず。而かも彼れ農相以て如何となすや。吾輩農相の意見のある所を知らんと欲するや切なり。」

ここで天野は、東京商品取引所の「売買高」と「受渡高」とを比較する。

天野はこれを示しつついう。「即ち東京商品取引所に於ける売買金額三千八百余万円の内、實際の受渡高は僅々四九

明治 32 年	高 買 売		高 渡 受	
	枚 数 (枚)	金 額 (円)	枚 数 (枚)	金 額 (円)
1 月	54,961	3,084,158	273	17,424
2 月	56,200	3,331,210	1,151	71,121
3 月	62,371	3,936,601	605	39,116
4 月	73,278	4,111,526	367	23,369
5 月	93,863	4,384,841	365	25,388
6 月	63,855	2,787,116	596	26,939
7 月	52,492	1,938,278	640	23,892
8 月	76,993	2,867,772	740	26,595
9 月	73,838	3,096,261	1,273	41,608
10 月	82,834	3,490,028	751	29,256
11 月	61,506	2,616,072	753	28,012
12 月	67,921	2,473,987	27,980	147,454
合 計	830,112	38,117,852	35,494	490,174

万円にして、此場合に於ても又賭博的空売買の商三千七百余万円
の多きに上り、実に全取引高百中の約九九に当れるを見ん。」

「而して取引の実際は凡て差金決済なるか故に、是等の金額は
直ちに以て実際に運転せる貨幣を代表せしむる能はずと雖も、仮
りに此差金を表面価格の一割と算するも、全国取引所の賭博の為
めに運転せらるる実際の貨幣尚数億円を下らざるを推知すべし。
之か為めに身心を勞し着実なる事業を忘るる者果して幾千ぞや。
其金額に依りて之を推すに其員数の極めて莫大なるは争ふべから
ざるなり。而して斯弊たるや之を大にしては、国の生産力貯蓄力
を消磨し、之を小にしては賭博に關係する人々を害するに止まら
ず。之か為め投機奢侈の風自ら社会の全般に及び未だ賭博に關係
せざる幾多着実なる人民を誘惑して此弊風に感染せしむるの影響
測り知るべからざる者あり。」

本論説が掲載された『東洋経済新報』の同じ号（第二五七号、明
治三三年四月二五日）は「如何にして国民の勤儉を奨むべき乎」「如
何にして株屋の勢力を抑ゆ可き」の二論説（無署名）を掲げてい
る。後者について紹介すると、まず、「本邦現時の経済社会は實に
株屋全盛の時代なり。」「東京商業会議所の如きを見るも其決議を

左右するの實権は今や彼等に掌握せられ、其建議と云ひ、其決議と云ひ、皆な所謂株屋的意見にして、夫の着実なる事業に至ては殆んど皆一隅に屏息し、復た其正当なる意見を發表するの機会を有せざる者に似たり。」「顧れば夫の愚にも付かぬ鐵道国有化論の如きは元是れ株屋の主張せる所にあらずや。而かも政府の当局は無下に之を排斥する能はず、遂に心にもなき議案を草し自ら之を議會に提出し、而して帝國議會又断然否決するの処置に出づる能はず、有耶無耶の間に之を握潰すの窮策に出てたるにあらずや、株屋の勢力能く議會を動かし能く政府を動かすに足るものなきに非ざるよりは焉んぞ茲に至るを得べけんや。」それでは、株屋の勢力がこうまで強力なものになった根本原因はどこにあるか。「他なし、夫の一大賭博場として幾多の山師相場師を養成する所の取引所是なり。」「基本たる取引所の改革を断行せば則ち其末たる株屋の跳染の如きは自ら之を制するを得べきや明なり。故に吾輩は株屋跳染の今日に當り此国家の大患たる株屋の勢力を制せんか為め、先づ此株屋製造所、山師養成所たる取引所の改革を断行するを以て急務と為さんと欲す。」

この無署名の論説も、恐らくは天野自身かその周辺の記者が執筆したものに相違ない。ここに推察できることは、「取引所改革」問題が、単なる道德の問題でなく經濟問題であり、更には政治勢力の帰趨とも関わる問題であることである。

『東洋經濟新報』の次々号（第一五九号、明治三三年五月一日）に、天野は「取引所問題に関して世の社会論者に警告す」（のちに『經濟策論』、第七篇所収）を掲げる。

本論説は、金井延らの組織する社会政策学会などの社会改良主義者に訴える趣旨のもので、取引所改革について社会論者が積極的に働きかけるよう希望する旨の内容となっている。すなわち、「中産以下の窮民をしてその貧困の状を脱せしむる」ことを社会論者が主張するのであれば、取引所改革は必至である。「夫れ労働者の賃銀を引揚ぐるの方一

明治 32 年	売 買 高		受 渡 高	
	石 数 (石)	価 格 (円)	石 数 (石)	価 格 (円)
1 月	803,100	7,468,236	750	7,117
2 月	785,450	7,809,045	2,950	29,913
3 月	696,800	6,909,956	1,050	10,395
4 月	815,150	9,487,070	2,450	23,593
5 月	717,200	6,844,815	11,100	102,786
6 月	571,900	5,506,439	14,050	133,632
7 月	866,000	8,290,564	26,600	252,966
8 月	1,252,500	11,458,317	22,050	187,425
9 月	1,454,050	14,062,525	21,700	211,707
10 月	1,642,150	18,130,113	11,000	123,090
11 月	1,807,900	21,919,762	28,050	332,953
12 月	1,178,800	14,929,078	26,350	322,260
合 計	12,591,000	132,810,920	168,100	1,737,837

にして足らずと雖、国民の貯蓄を奨励し一国の実業的資本を増加するか如きは其一大要件とす。」「然るに今翻って本邦取引所の現状を見るに皆是れ空売買の大市場にして、人を誘ふて差金取引の悪習に沈溺せしめ、その勤儉の心を滅し実業の念を亡ほしその資産を浪費して空相場の資に供せしむるの弊や掩ふ可からざるの事実なり。」「然らば則ち取引所問題なる者は一般の経済上重大なる問題なると同時に労働者の利害より之を觀察するも捨置き難き大問題にして、社会論者の決して等閑に付す可からざる者なり。」「夫の労働者の朋友少なくともその小敵たる企業家を之れ攻めて此大敵たる相場師及び相場師の養成所たる取引所に向ふて未た一矢をも酬ゆる所あらざるは吾輩世の社会論者の為めに取らざる所なり。」「ここで天野は東京米穀取引所の「売買高」と「受渡高」との数字を示している。

「その取引の最大部分は純然たる差金取引にして毫も現物受渡し
 の意思ある者にあらず。」「その昨年中に於ける売買高に対する
 受渡高の割合は僅々七〇分の一に足らず、而して此空売買の金額
 は一億三千万円以上にあり。」「資金の濫費此に至りて極まれりと
 云ふ可し。想ふに此等の資金若し之を空売買に使用せずんはその

大部分は生産的資本となり、従ふて労働者の需要を増加す可き運命を有する者なるに、その取引場裡に放下せらるる爲めに一国の生産に大障礙を与ふるは勿論、殊に労働者の利害より之を見るも彼等に取りて大不幸を来す者と云はざる可からず。」

さらに天野は、「空売買の真相及其公害」(『東洋経済新報』第一六〇号、明治三三年五月二五日、のちに『経済策論』、第七篇に所収)を発表する。

本論説で天野は、自ら二つの問いを立て、自ら答える。

第一は、「空相場は博奕なるや否や」である。「反対論者輒もすれは曰く夫れ現時各取引所に行はるるの空売買は皆是れ一種生産的行為にして毫も賭博と同一視す可き者にあらず。故に此等取引の盛行毫も憂ふるに足らざるなり」と。「蓋し空売買必らずしも博奕にあらず、現物なきに売り現物なきに買ふなり、時に正当の商業にも必要にして必らずしも博奕を以て論する能はざる者あり。」「然れとも左の三要素を包含する空売買取引に至りては是れ純然たる空相場にして断然之を商業的賭博と称して差違なかるべし。」「(1) 売買の体裁形式を備ふる迄にして、(2) 真に現物を売買受渡するの意志なく、(3) 唯た価格の差額を仕払ひ以て取引を決済するの意志あるもの。」

しかし問題は、その意志の確認である。「唯た此空売買の全部或は大部分は毫も売買受渡の意志なき空相場なるや否やに至りては数字を以て之を証明する能はず」「是故に若し彼等の意志を推知するに足るの、確然たる法律上の証拠十分なるあらば、此等賭博的取引は普通の賭博と共に之を嚴禁するに如くはなしと雖如何せん此証拠十分ならずして之を取押ふる能はず、左ればとて総へての空売買を禁せん乎玉石共焚の憂あるを免かれず、是に於て乎法網の不完全、徒らに細鱗を捕ふのみにて却って此吞舟を逸し商業的賭博の盛行愈よ甚しく我同胞をして益々差金取引の惡習に赴かしむるあるのみ、之を以て生産的行為と爲す、天下何物か生産的行為にあらざらんや。」

第二は、「空相場は其害相場師一身に止まるや」の問いである。これに関して三点から答える。

「(1) 一般経済上より之を見れば一国の資本減少し一国の生産力を減少するの害甚大なり。」

「(2) 且つ夫れ社会問題の方面より見るも、下層社会に於ける金利低落の趨勢を妨げ、下層社会に於ける給料騰貴の傾向を抑ゆるの弊頗る大なり。」

「(3) 更に転じて財政上より見るも其弊の甚た恐る可きを知るなり。夫れ資本は平生にありては国民の納税力の由て出づる所非常の場合にありて公債応募力の由て起る所の大財源なるにあらずや。而かも空売買の流行の為に此財源の涸渇するに至らば政府財政の基礎何に由て確立せん乎政府財政の信用何に由て保持せんや、是れ大に財政家の留意を望まざる可からざる所なり。」

『東洋経済新報』のこの同じ号(第一六〇号、明治三十三年五月二十五日)に、無署名の「商業会議所の刷新に關し實業家に望む」が掲げられている。この論説は、商業会議所において「其決議を左右するの實権は全く虚業家相場師等の悪分子に掌握せられ、着実なる商工業を代表せる善良なる分子は皆此悪分子の為に排斥驅逐せらるるに至る。」「抑も是れ全国商業会議所を挙げて株屋相場師の機関に化了せしめたるの結果に非ずして何ぞや。」

この無署名の論説は、本来、商工業の利益を代表すべき筈の商業会議所において、株屋相場師、賭博的虚業家が幅をきかし、益々その勢力を増しつつあることを憂慮する内容のものとして注目さるべきである。

三、「取引所改革の三要目」(明治三十三年)

明治三十三年六月五日、天野は「取引所改革の三要目」(『東洋経済新報』、第一六一号、のちに『経済策論』に所収)を執筆した。これまでの天野の論説は、空売買を賭博なりとして論難するに止まっており、提案としては限月を一ヶ月に短

縮せよ、という論点のなる。「今や歩を進め」

取引所改革の三要件

(1) 取引所の数。

は大に其数を減し以て

(2) 定期期限。コ

様の反論があり、それ

① 「当業者往々反

売買戻を禁ずるの外な

於けるか如くするも出

み。然りと雖も是れ正

し空売買の分量を減少

② 「当業者或は曰

と。吾輩決して之を信

日となるに従ふて空売

③ 「或る当業者曰

に失せずや」と。此論

買の分量大に減少す可

はさる可からざる所とす。吾輩は寧ろ日々の取引を希望する者なりと雖、当業者の財産権亦之を顧みざる可からざるに因り折衷して一ヶ月制を唱ふる者なり。」

(3) 取引所の組織。「吾輩は本邦の取引所は総へて自治の制に因らしめんと欲するなり。」「夫れ取引所の組織之を大別すれば二となすを得可し。曰く自治の制曰く干涉の制是なり。」「自治の制は大体に於て會員組織なる者に同しく、干涉の制は即ち株式組織なる者と等し。」「自治の制の下では「その營業に必要な信用は取引商自身の信用を以て之に充て、取引商以外の保証的信用に依頼するか如きあらざるなり。」「これに対して干涉の制、即ち特定の株式会社の干涉束縛の下にあつては、「その營業は特定なる株式会社の保証的信用の下に行ひ、自己の独立的信用に依頼するの必要極めて少なし。」「天野が、自治の制、即ち會員組織を可とする理由は、次の通りである。「蓋し自治制度に尊ふ所以の者一にして足らずと雖取引商をして自己の信用に因るにあらずんば立つ能はさらしむることはその尤も大なる者なり。彼れ己れの信用に依頼するの必要あるに因り優勝劣敗の作用自然に行はれ、確實なる会社確實なる組合確實なる個人は取引商の席を占むることとなり、不確實なる者は遂に遠く遁逃するの已むを得ざるに至らん。為めに無謀なる空売買の弊を少なふし実物取引の便を盛んにすることその幾くなるを知らず。その今日の日本に於けるか如く仲買人の信用ある者少なく百弊千害の之より生ずると同日の論にあらざるなり。」

次号に掲載された「取引所の組織を一変せよ」(『東洋經濟新報』、第一六二号、明治三十三年六月一日、のちに『經濟策論』に所収)は、會員制度の採用を奨め、會員制度の採用に伴い、担保制度の廃止が可能となり、定期期限の短縮と現物取引への移行が生じ、仲買人も信用ある者のみが残ることによってその品位も向上する筈、と説く。

天野は、取引所を「白昼公開の賭博場」とし、その原因を取引所制度のあり方に求め、わが国が干涉主義(取引商

をして自営自尊の主義に出でしめす、他の株式会社の干渉担保の下にその業を営ましむる者」を採用していることに疑問を呈する。「此組織の下にありてや取引商は特定の株式会社の担保的信用の下に業を営み一に己れ自身の個々銘々の信用に^ま須つことあらざるなり。」そこで、**會員制度**＝自由組織に改革した場合の利点はどこにあるか。

① 担保制度の廃止。「若し夫れ此組織を一変せん乎、為めに生ずるの利益多々あるべしと雖其尤重大なる者は所謂担保制度の廃止是なり、即ち取引商をして自家銘々の信用に依頼せしめ夫の干渉組織の場合の如く他の会社の担保的信用に依頼するを得せしめざるにあり。已に此担保制度の廃止あらん乎、我取引所幾多の欠典は自然にその大部分を消滅するに至るべきなり。」

② 転売買戻の縮少。「想ふに此方たるや我取引所をして大賭博場たらしむるの最大原因なりとは世人の一般に認むる所なり。而かもその盛んに行はるる所以の者は、一に一株株式会社の担保あるか為めなり。今仮りにこの担保を撤去して、全く仲買人各自の信用に由て営業せしめん乎。英米に所謂「リング」なる者或は行はれん、今日の如き転売買戻は到底行はれず、従ふて空相場の分量大に減少するや敢て疑を容れざるなり。」

③ 定期期限の短縮。「今日の場合、取引商かその期限の益々永からんを欲し其間種々の投機を試みんと欲する者は他なし、実に取引所の担保あるか為なり。若し此担保を撤去して一に取引商自身の信用に一任せん乎。相互の間相危むの故を以て三ヶ月の約束は二ヶ月となり一ヶ月となり、二週間となり日々となるや必せり。実に英米にありて定期期限を漸々縮少し、現物取引の漸く盛になれる所以の者は一に取引商互に相危ふみて大事を取れるか為めなるのみ。故に今茲に取引所の組織を更革し担保制度を廃せん乎、定期期限の短縮現物取引の増加の如きは令せず勤めずして自ら行るるや必せり。」

④ 取引所商の品位。「今日の場合此取引商の間自然淘汰の作用行はれずして、較^やや不確實無資力なる取引商の盛ん

に營業に従事し得る所以の者は、一に取引所の担保あるか為めなり。若し此担保を撤去せん乎、取引商皆な個々銘々の信用に依らざる可からざるを以て優勝劣敗の大法に因り夫の比較的不確實無資力の者は遠く遁逃し、確實にして資力あるの個人、組合、会社漸く取引所の席を占めて其間互に健全の競争をなすに至るや必せり。果して然らば乱暴空相場の弊漸く減し、現物取引の利漸く増加せんことは是れ自然の理にして火を見るよりも瞭然たるにあらずや。」

「松方伯と取引所問題」(『東洋經濟新報』、第一六三號、明治三十三年六月二十五日、のちに『經濟策論』に所収)は、松方正義の見解に賛同しつつも、會員制度の導入に松方が言及しない理由を問いただす趣旨の論説である。すなわち

「松伯の説なりと伝ふるを聞くに是れ殆んど吾輩の所執と符節を合する者なり。其要に曰く今や取引所に於ける空売買の弊極まれり、之を救ふの方先つ取引所の数を減して十数ヶ所とす可し、次に定期々限を縮めて長くも一ヶ月を踰えしめざる可し、次に転売買戻に制限を加ふ可しと。」

しかるに、取引所組織の問題には関説するところがないのは何故か。「此組織の問題に関しては松伯現制度を以て足れりとするや。是れ吾輩の切に聞かんと欲する所なり。吾輩を以て之を見るに、今日取引所の病根は専らその担保制度にあり。故にその組織を一変して會員組織とし、従ふて此担保制度を廃止することは是れ根本的の匡正法たるを信じて疑はざる者なり。」

「夫れ担保制度の廃止は策の最良なる者、改良を組織変更以外に求むるは策の尋常なる者なり。吾輩は松伯の百尺竿頭に一步を進めて断して組織変更の根本的療治法に従事せられんことを望む者なり。」

「紡績連合会对三品取引所の弁難」(『東洋經濟新報』、第一六四號、明治三十三年七月五日、のちに『經濟策論』に所収)は、当

時の綿糸の価格暴落を見て、大日本綿糸紡績同業連合会において、總會決議をもって勅令改正を農商務省に請願、「綿糸取引に限り其最長期を一月以内と爲し、其取引に就いては一切買戻を禁止し転売は權利移轉の法に因らしむること。」を求めたのに対し、大坂三品取引所がこの取引所法改正請願に反対する運動に出た。

天野は、本論説において、紡績業者の主張を聞き、これに反対する大坂三品取引所の意見を次のように紹介する。

「其要に曰く紡績業者は綿糸の暴落を以て其罪を取引所に帰すと雖、其原因は金利騰貴の爲めに内地に於ける需要の減少せること、及び清国事變の爲めに海外に於ける需要の減少せること、及び紡績業者が無謀にも棉花の大輸入をなせること等に基き之を以て直ちに取引所の罪となすは頗る謂はれなしと。」「又曰く、綿糸の暴騰暴落は紡績業者の空売買が之を招きし結果にして、江戸堀筋の一挙一動は近頃実に全市場を支配したる有様ありしにあらずや。然るに其罪を作りて之を他に嫁せんとするは曲直のある所自ら判然たるか故に、仮ひ紡績業の運動ありとも当局者の之れを聴許せざるや従つて明白なり云々と。」

この三品取引所側の反論について、天野は次の点を取りあげて問題にする。

「而も此紡績業者をして此空売買を行はしむるに至れる原因如何と顧れば、彼れ紡績業者の射倖心の結果なりと雖、彼の取引所の制度の宜しきを得ずして我が忠良なる同胞を賭博奢侈の惡習に誘導するの結果なりと云はざる可からず。」

すなわち天野は、取引所の制度の罪を問い、制度の改革を唱導する。「若し夫れ取引所の禍根を永遠に絶ち、之をして白昼公開の賭博場たらしめんと欲せば、断然として取引所の担保制度を廃せざる可らず。少なくとも定期期限を短縮し転売買戻の方を抑制せざる可からざるなり。故に吾輩は紡績連合会の益す奮つて此改良案の実行を計るあらんことを望み、又農商務省に於ても決然此惡制度を改革し我か財界万年の基礎を定めんことを勤むる者なり。」

なお、同志（第一六四号）には、谷川達海氏（岡山紡績会社々長）の取引所改革談が掲載されている。

「東西株式取引所組織の差異」（『東洋経済新報』、第一六九号、明治三十三年八月二五日、のちに『経済策論』に所収）は、外国の場合を紹介しつつ、わが国取引所の改革論を補強する趣旨の論説である。

「吾輩は本報紙上に於て本邦取引所の効少くして害多きこと、及び之か改革の必要方法を論せること十数回の多きに至れり。而して之か改革の根本的方針は俗に所謂株式組織を禁止して総へて会員組織となし、以て夫の担保制度を後來に絶滅せんと欲するにあり。」

そこで天野は、欧米の取引所について次の様に紹介する。

① 「北米株式取引所を見るに其内部の組織は是れ株式公債取引商の「クラブ」にして所謂会員組織なる者なり。而してその外部の結構は他に特別の会社ありて之を監督するにもあらず。」「是れ内部に於ても外部に於ても純然たる自由組織なり。」

② 「英国に於ける株式取引所を見るに、米国と同様にして、その内部の組織は公債株取引商のクラブ的団結たるに過ぎず。所謂の会員組織なり。而して外部の結構に至りては、毫も政府の干渉を受けず、況んや他の株式会社の監督保護を受くるか如きあるなし。是亦内部に外部に純然たる自治の組織なり。」

③ 「夫の欧州大陸に至りても、株式取引所は、その内部の組織に於て取引商のクラブ的団体にして所謂会員組織なり。唯たその外部の結構にありては、英米と其趣を異にし、株式取引所の重なる者はその成立に於て政府の特許状を要するのみならず取引商の権利義務及取引の方法等は特別の法律を以て之を規定しあり。」「去りながら政府以外の株式会社が取引商人を監督し保護するか如きは欧州大陸に於ても見る能はざる所なり。」

これに続いて天野は、伯林、維也、巴里の取引所の組織に言及し、最後にわが国の取引所の現状を次のように特徴づけていう。

「而して本邦株式取引の殆ど全部を占むる株式組織の取引所にありては、其内部の組織に於て取引商人のクラブ的団体に非ざるなり、取引商人以外の一種特別の人々の株式的団体なり。而して其外部の組織にありては一方には政府の嚴重なる監督周密なる干渉を受くると同時に他の一方には取引の主人公たる仲買人の為めに家を貸し監督計算に任し更に進んで違約より生ずる損害を弁償しその担保の下に取引をなさしむる者なり。従ふて其の取る手数料も亦莫大なる者あり。」「本邦に流行する株主組織なる者は文明世界に其類を見ざる一種異様の組織なるを論し以て世人の反省を求めんと欲する者なり。」

次号第一七〇号に、天野は「取引所問題に關して国民及藤侯に望む」(明治三十三年九月五日、のちに『經濟策論』に所収)を發表する。本論説の趣旨は、現時の取引所は「白昼公開の賭博場」であつてその改革が急務であるが、当事者は「臭き者身知らずの喻えの通り」その弊害を感ずること少なく、また「心之を知るも利害の關係の爲めに支配せらるるを以て独り自ら改革を思ひ立たさるのみか、他に之か改革を計る者あらは手を換へ品を更へ術策の数を尽して之を妨害せんと試みつつあり。京品兩株式取引所より調査員を海外に派したるか如き、又近々取引所連合大会を催すの下心あるか如き何れか改革反對準備にあらざらんや。」従つて、「之か改良に従ふの一事は決して之を当事者に依頼す可からず。」かくて天野は立憲政友会に期待し、これを激勵して「公益を目的として解決あらんことを希望」するのである。

(明治三十三年九月一五日に立憲政友会發会式、總裁伊藤博文、同年一〇月一九日第四次伊藤內閣成立。これよりさき、八月二五日伊藤博文、政友会創立委員會を開き、宣言及び趣意書を發表した。)

四、小 括

以上は、天野の初期における取引所批判の概要を紹介したにすぎない。これよりのち、「勤儉新論」を経て、いよいよ取引所批判は激しさを増し、明治三五年の勅令第一五八号が成立する。しかし天野は、この勅令第一五八号をさえも、未だ半ばに止まるものと評し、取引所の限月短縮の徹底を主張するのである。しかし、以上をもってしてもすでに、天野における取引所批判の論調のよってきたるところの若干は明らかになったと思う。

(一九九四、一一)